豊かな感性を育む図画工作科の支援

1　図画工作科（以下，図工科）における豊かさ

現代は身の回りにものがあふれ，大人も子どもも，ものに対する関わり方が希薄になっている。また，子どもが自分の考えで手などを働かせて，ものをつくり出したりすることがとても少なくなっている。[1] しかし，子どもたちは本来，直接体験を絶えず求め，ものをつくり出すことを好み，既成の枠にとらわれない創造力を有しているものととらえるならば，大人として，子どもたちにそのような環境や時間などを保障する機会を設ける必要がある。また，その時々の子どもたち自らの素晴らしいひらめきや活動に気づかせ，自らの気持ちをふりかえり，考えさせるとともに，感じとらせる場を設定する必要があろう。そのことによって，子どもたち一人ひとりは，解放感の中で，集中と心地よい緊張感を持ちながら，自らのよさに気づき，自信を持って，自らの活動を積極的に推し進めるエネルギーを蓄積していくものと考えられる。

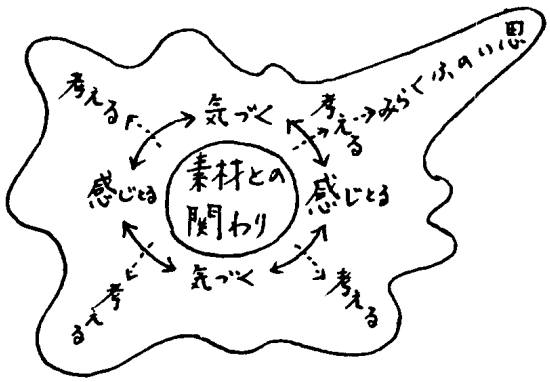
梶田叡一氏はその著書の中で，「実感・納得・本音を大事にする習慣をつけていくと同時に，その実感・納得・本音そのものを変えていく教育が考えられなければならない。」[2] と述べている。図工科では，造形あそびの，教育的意義や図工科全体における位置づけの重要性を視野に入れ，造形（鑑賞も含む）への，よりよいもの，より高いものを求めていくこだわりを豊かさと踏まえつつ，実践を試みてきた。

2　なぜ，今，『豊かな気づきや感じとりを育む支援』なのか

先の梶田氏は，子どもの本音を大事にすることに触れ，「その子なりの借り物でない内側から出てくる子どもなりの想を引き出す。」「概念にする以前の世界，つまり，生の世界を引き出す。」必要性のあることを指摘されている。これは，「あっ。」とか，「おっ。」とかの本物を通じての初発の感覚を大事にすること，既成の概念や他の人とは違う自分の感覚や感情を大事にすることを意味づけている。このことは，最も原初的な感覚を今一度，取り戻すことを意味しているものと考えられる。

図工科として，今年度の本校テーマが深く関わり位置づくのは，素材や作品などとの直接的な関わりから，気づきや感じることの見つめ直しを行い，改めて，自らに気づかせ，感じとらせる学習を仕組むことにより，自らの感

覚をとらえ直すことにつながると考えられるからである。つまり，初発の気づきや感じることをもとに，それらをつなぐ考えを深めたり広げたりする学習によって，さらに自らに，気づき・感じとる循環が学習に発展を促すものととらえることができるのである。そして，トータルに踏まえた時，その中で，突出してくる感情が“自らの思いの膨らみ”であり，『自己実現を目指しためあて追究』に向けての“こだわり”の大きさになってくるものと考えている。(右図参照)



3　実践事例から

先に，“豊かさ”を造形への，よりよいもの，より高いものを求めていくこだわりととらえた。そこには，ものの感じ方や見方・考え方の広がりや深まり，変容が考えられなければならない。

図工科の活動をもとに，4つの視点からその豊かさを探ってみた。

◇材料や作品との関わり
◇自らの発想とそこからの自分が思いついた活動
◇主体的に進める活動過程
◇自分や友達のよさに気づく表現活動

以下，材料との関わりを中心に発想の広がりを意図した実践について述べてみたい。

(1)　題材名　　ひらめき名人になろう　～きみの石の声を聞こう～

(2)　題材について

子どもたちは，乏しい身の周りの自然環境の中にあっても，生き生きと触れ合おうとしている。私たち大人は，刺激的な間接体験に魅了される子どもたちとの観念的なとらえと共に，自然のありのままの姿やよさを敏感に感じとる本来の姿を今一度見つめ直す必要があると考えられる。子どもたちに身近な，自然素材との関わりを通じ，いろいろな考えを引き出し，自然物を扱う楽しさや表現する喜びを味わってほしいと願っている。

本学級の子どもたちも，通学時間や習い事などにより，帰宅後の遊び時間が限られ，室内遊びが多いのが実情である。しかし，その一方で，これまでの学校生活を見ると，周辺の草花を摘み，虫を追い，砂山を夢中で作り，土

だんごを懐にしまい宝物のように持ち帰る姿などを目にしてきた。このような子どもたちに石や小枝などを意識的に取り上げ，身近な自然のよさを積極的に生かす場をもつことは意義深いことと考えている。

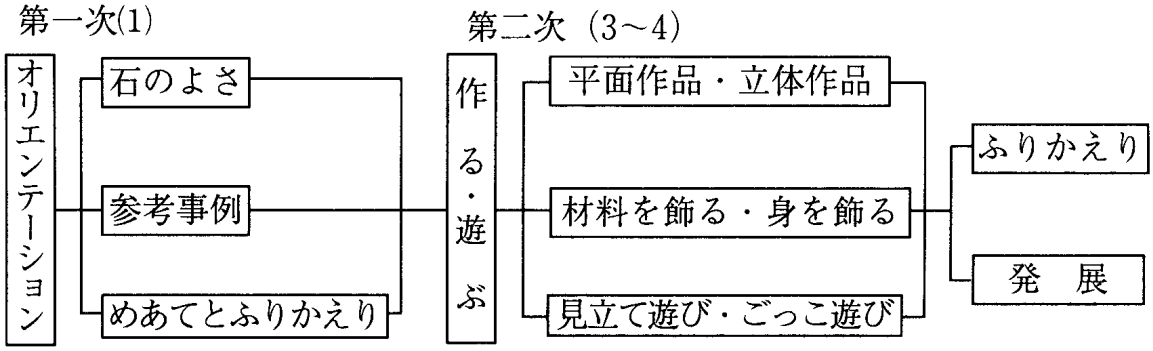
(3)　指導目標

1　身近な自然に目を向け，造形活動に積極的に生かすことができるようにする。

2　自分らしい表現方法で造形活動を楽しむことができるようにする。

3　友達や自分の活動のよさに気づくことができるようにする。

(4)　指導内容と計画・・・・・・4～5時間（本時　第一次　第1時）



(5)　授業設計の焦点

予め，気に入った石を一つ準備させる。一人ひとりの気に入った訳を確認することで，個々人が選んだ基準に幅があることに気づかせる。そして，ゆっくりと多面的に見つめ，触れるなど，具体的に見直すことで，自分の石についての新しい気づきが生じるものと考えている。また，隣同士で交換し，感じたことを述べ合う場を保障することで，自分の石へのとらえがよりはっきりとしてくるものと考えている。また，石以外の自然素材を生かした参考事例を提示することで，その可能性を広げ，素材収集の興味を引き出すとともに，見通しを持った主体的な活動に結び付けようと考えている。

(6)　本時の目標

石への愛着を深め，石から自分らしい発想をし，イメージしたものをつくる見通しをもつことができる。

(7)　準備

教師……ＯＨＰ，実物投影機，参考事例など，児童……気に入った石

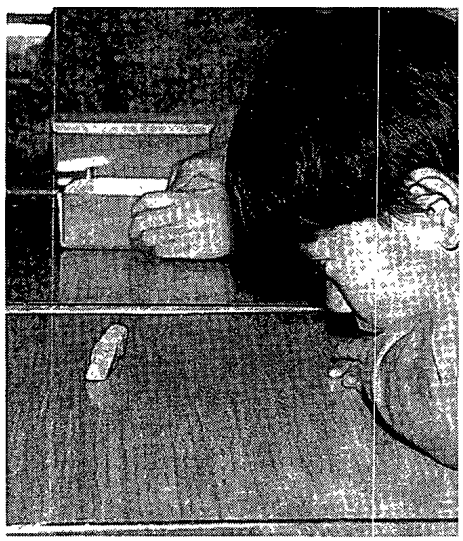
(8)　評価の観点

関心・態度・意欲	進んで石や参考事例と関わり，いろいろな考えがもてる。
発想や構想の能力	色・形などから思いついたり，想像を膨らませたりできる。
創造的な技能	
鑑賞の能力	参考事例から，友達のよさやおもしろさに気づくことができる。

(9) 指導の実際

学習活動	指導・支援活動
1 自分の石を見つめ，対話する。 視覚　触覚	1　自分への気づきを確認し，新しい気づきを引き出すために，以下の活動を行う。 ・予め，自分の気に入った石を一つ収集しておく。 ・見つけた場所，気に入った訳を聞くことにより自分が選んだ石であることを再確認する。 ◎また，友達の意見を聞くことで，選択基準の幅や自分の意見との類似や相違点に気づかせる。 ・じっくりと多角的に見つめる，目を閉じ，ていねいに手にとって触ることで，新たな気づきや発見を促す。 ・自分の感じ方を深めるために，自分の石が語りかけてくる言葉を考えさせるとともに，友達と交換し，お互いの石への気持ちを交わす場をもつ。
2 発想を広げる。 幾種類かの自然素材 参考事例の鑑賞	2　発想の広がりを持たせるために，気に入った石でしてみたいことを考えさせる。また，自然素材のよさや収集活動の興味づけを図るために他の素材や参考事例を鑑賞する。 [OHP・実物投影機活用] ・楽しい見立てのできそうな素材をいくつか選んで提示することにより，他の素材への興味・関心を持たせる。 ・石を主とした作品や，いろいろな自然素材を活用した事例を鑑賞し，表現の面白さやよさ，素材の生かし方を参考に，次週からの見通しを持つ。
3 めあてと見通しをもつ。	3　一人ひとり，自分の考える活動に見合う収集活動の提案を行うとともに，子どもとの学習計画や評価の共有を図る。 ・道具箱いっぱいを目安に，気に入った材料の収集をすることを提案する。 ・時間計画を知らせ，子どもたちと教師の評価観をすりよせ，共有化を図るなど，見通しを持たせる。
4 本時の活動をふりかえる。	4　石への関わりや自分なりの発想をふりかえり，次週までにどんな素材を生かし，どんなことをしようと考えているのか，簡単に確認する。

【学習活動】



この学習に入る５日程前に，子どもたちには自分が気に入った石を一つ見つけておくように指示を行った。“先生がちょうだいと言ってもあげない”と言えるような石を見つけられるかなと，提案しておいた。当日までに，お道具箱の中に，さまざまな石が用意され，子ども同士で見合う声が聞かれた。

＜主な発問から＞

①“ひらめき”（題材名から）ってどういう

意味かな。

②皆さんに聞きます。どこで拾いましたか。どうして気に入ったのですか。

③じっとその石を見つめてみましょう。今度はゆっくりと回してじっと見てみましょう。この時間に初めて気づいたことがありますか。

④目を閉じて，触ってみましょう。新しい気づきがありますか。

⑤君たちに拾ってもらった石の声が聞こえますか。聞こえた人はしめたものだよ。友達になれるから。

次に，隣同士で石の交換を行い，それぞれの石のもつ味わいや受け取り方の類似や相違点を自由に話し合うことにより，自分の石への愛着や友達の石のよさにも気づかせたい。

【学習活動２】

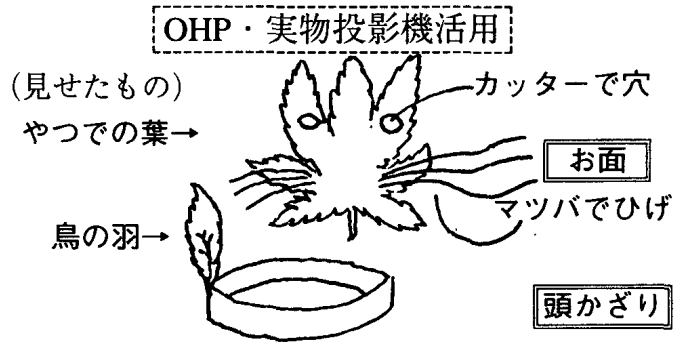
ここでは，一つの石をじっくり見つめ直す活動から，自然素材のよさを幅広く感じさせる活動を組んでみた。つなぎとしての，石の数に着目させながら，他の素材への移行を図ってみた。ＯＨＰを活用し，向きや角度を変えることで幕に映し出される影からの見立てを行い，素材のもつ面白さや素材そのものに気づかせていく活動を行った。

＜主な発問から＞

①気に入ったその石でどんなことができるかな。気に入った石が二つなら，また，たくさんならどんなことができそうかな。

②石だけでもいろいろな活動ができそうだね。でも，自然のものって，石だけじゃないよね。

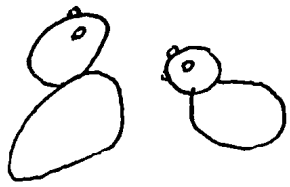
・これ，何に見える。
・正体は何だろう。
・どんなことができるだろう。
・先生は，こんなことをしてみたよ。



【学習活動３】

ここでは，今後の学習活動の見通し（時間計画や活動）を持たせ，個と集団のめあての共有化を図った。

重なりのある石の作品



ちょっとかわった鳥

＜主な発問・指示から＞

①自然のものって，いろんなことができそうでしょう。そのためには，気に入った自然のものをいっぱい集めておかなくっちゃならないんだ。石をたくさん集める人もいるでしょうし，いろんなものを集める人もあっていいよね。交換してもいいんだから……。皆さん，どうしますか。

②この日（学習する）までと，この日（学習する）に，どんなめあてを考えたらいいと思いますか。

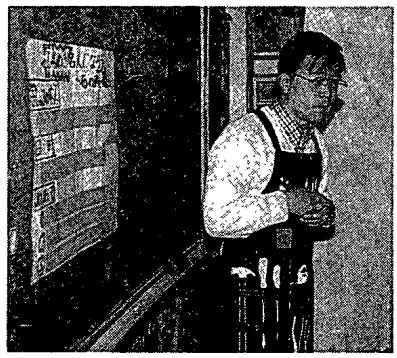
教師の提案した集団としてのめあて

・気に入った材料をたくさん集める。

・材料から自分らしい考えを膨らませてつくる。

・自分や友だちのいいところを見つける。

③先生，実はこんなのをつくってみたんだよ。



【学習活動４】

ここでは簡単に，本時の活動をもとに，次の学習までの見通しを持てたかどうかをたずねた。

＜主な発問＞

①どうでしたか。次の学習までにこんな材料を集めてみたい，こんなことをしてみたいというのがありましたか。

3　考察

本授業を以下に示す仮説に基づいて，分析してみたい。

(1)　授業仮説

気に入った石の，色・形・材質を今一度見つめ直したり，参考事例からヒントをつかんだりするなど発想の仕方を知り，さらに，学習の見通しを持たせる導入を行うならば，自然素材への興味・関心を深め，自分らしい深みや広がりのある気づきや感じとりを身につけることができるであろう。

(2)　分析の視点

①　石を見つめ直したり，自然素材や参考事例をヒントに，自分らしい気づきや感じとりを行い，自然物への興味・関心を持つことができたか。 ②　学習の見通しを持たせる導入を行うことにより，子どもたちがめあて意識を明確に持つことができたか。

(3)　分析

ここでは，本授業後の質疑応答の中で出された意見交換を基に，参観していただいた梶田叡一先生（京都大学教育学部）による観察と分析も紹介しながら記述したい。

＜視点①について＞

○　学習に先立ち，子どもたちにただ，「持って来なさい。」ではなく，「気に入ったものを，一つだけ持って来なさい。先生がちょうだいと言っても，あげないような石を。」この投げかけにより，どうしてくれないのか，を聞くことができた。子どもたちの考えを耕すことができた。

○　目を閉じて触ってみる感覚を大事にすることは，子どもたちの奥の奥から出てくる子どもなりの想を引き出すことになった。これは，概念にする以前の世界，生の世界を引き出すことになる。子どもたち以上に大人こそはもっと大事にしなければならない。

　一つの石を見つめるという，同じことをしながら，違う感覚を共有する中で，幅が膨らみ，いろんな人の見方がその子の気づきを引き出すことになる。ささやかな石が意味を持っている。

○　他の子の発言にもっとこだわらせる必要がある。一つの石を通してみんなで考える場を設定できたらよかった。その意味では，本時の授業は，２時間扱いとした方がよかった。

○　ＯＨＰで取り上げた素材が子どもたちに想像を膨らませるものだったため，豊かな見立て遊びが行えた。しかし，学習活動１から２へのつながりが早急だったため，石のよさの押さえが十分でなかった。もっと子どもたちと石のよさを共有できれば，他の素材のよさへの着目の度合いが高くなったものと考えられる。そして，取り上げた一つ一つの素材への豊かで広がりのあるよさを見つめることができたものと考えられる。

＜視点②について＞

○　子どもたちに集団としての共通のめあてを考えさせる場を設けたもの

の，発問に無理があり，教師から提出した形となった。提示するのであれば，すでに自分なりのめあてを持ちつつあったことを考慮に入れなければならない。また，一方法として，すんなりと教師の評価観を示しておくに止めておくことでもよかったのではないだろうか。そのかわりに，学習活動４を膨らませ，一人ひとりの考えを具体的に引き出す方が集団としての見通しや発展に寄与できたのではないだろうか。

○　教師の思い入れのある作品を見せることが，ある子には活動に見通しを持たせることになる。その一方で，ある子には，考えを枠にはめることにも通じるので，今後，個別の対応に配慮しなければならない。

4　成果と課題

今回，身近にある自然素材を取り上げ，その見つめ直しを進めた。ふだん，何げなく見ているものへの積極的なよさに気づかせたいと願ったからである。また，発想段階でものとしっかり触れ合うことで子どもたちの心を耕すことができると考えたのである。本授業において，子どもたちは，柔らかな想像力を十二分に発揮し，たくさんの意見交流から，見方，感じ方を幅広く共有できたのではないかと考えている。けれども，もっとじっくりと，子どもたちが自然素材と触れ合う時間を保障する必要のあることも分かった。また，この授業は，題材としての導入部分に過ぎず，全体構成の中での位置づけをしっかりとしたものにしなければならない。

参観していただいた梶田先生は，授業を見る視点として，①雰囲気②構成③願い・ねらい・活動の在り方を取り上げられた。その中で触れられた真の個性教育とは，真の子ども中心主義とはどのような教育であるのかを求め，今後も自分自身を見つめ直していかなければと考えている。

「教師に大切なものはなんでしょうか。」の最後の問いかけに対して，自分への問い直しを怠らないことと，おっしゃられた言葉を反芻しながら，教育環境としての教師の重要性を再確認する次第である。

《引用・参考文献》

1)　石田寿男編著『新しい造形あそびの考え方と実践』開隆堂１～２頁

2)　梶田叡一著『内面性の人間教育を』金子書房

〃　『学力観の転換と授業のあり方』内外教育1995年７月号６～13頁

3)　宮脇理，山口喜雄，山木朝彦，『感性による教育の潮流』国土社

（阿比留　時彦）